

鶯のこゑ

渡邊信覺

うららけき障子明りや庭に來て啼く鶯のこゑの冴えたる
 大庭に櫻吹雪の降りしきり宮居靜けく人影もなし
 うらら日を浴びて若芽の萌え初めしカリンの下に母と子は立つ
 うち見ればぶなもかへでも芽は萌えて雜木林に雨しづかなり
 わが病癒えししるしに播きにけるカリンは既に實を持ちてをり
 久々に姉と連れ立ち草原に土筆を摘めば心なごむも
 土筆摘む男の兒ら高くもろ手あげ母よび招く若草の原
 花の名を問ひしはおもはゆ庭隅に白く咲けるは大根の花
 たらちねの送り給へる小包をひらきて見れば好物の餅
 雲ふる波木井の川に日は暮れてかそけくわたる水車のきしり
 山を下り里に出づれば遊ぶ兒ら法衣の袖に戯れにけり
 村人の手打ちの蕎麥に切り火して心ありがたく頂きにけり
 雷のとどろに鳴れば鶏は濡れそぼちつつ小屋にかけ來ぬ



俳句

駄句集 田村孤雪

二日早炭を燒きをり向ふ山
 塔高し風に落花の吹き上がる
 海風の渡る廊下やハンモック
 魂柵にせばめて敷きし寢床かな
 芭蕉打つ夜雨の音に目覺めをり
 いつとなく住みつゝ繪師や寺の秋
 金屏の暗きにおはし秋の雨(村雲尼公)
 秋晴や勅額守り僧の列(勅額拜戴四週年)
 冬籠佛師が髻の彫ほこり
 長廊下撒豆遠くつつ走る

雜詠十句 帶金嫩葉子

山晴れて秋逝く日の風速き
 茶の花や明るう夕の風猛り
 落葉揺く人影淡き朝木立
 眼つむりてうつろ心や日向ぼこ
 子を背負ひて冬日親しく編めるもの
 笹鳴のきかれ明るき朝障子
 刻み葱のするどき匂ひ浅き春
 後へ後へ風に尻向け麥を踏み
 若葉朝の雨さむく灯をたてまつる
 蔓ものの窓に明るう五月雨るる